東郷　敏

出　逢　い（その二）

「先生、ご指導においでくださいませんか」

それから堰切られた水のように、もう止りません。矢継ぎ早に申し上げました。「私共は会社で坐禅をはじめます。先生ご指導においでくださいませんか」と。――これは断じて本心ではなかった、思いもしなかった〈ことば〉が、飛び出してしまった。咄嗟に嘘だとは言えなかった。もう取り返しがつかない。みんなビックリして何も言葉がなかった。先生から、「ハイッ、結構ですよ！　何日何時ですか？」「明日の朝からです」と、また言ってしまった。「ハイ、承知しました。じゃあ、間もなく私も、追っかけて参ります。」先生のご都合なんぞ考えもせず、御尋ねもせず、口走っている。先生も先生で、「Ｎｏ！」とは言わ

ない、実にスムーズである。打てば敏々ひびく。私は前後の見境もなく、独り歩きしてしまっている。そして大変な約束をしようとしている。成り行きに少し気付いて戸惑っておりますと、呆気にとられた先代社長が、「まあ先生、この者たちが無理を申しあげてスミマセン。礼儀も弁えておりません。どうぞ御許しくださいませ。何かとドウゾよろしく御願い致します」と、深々と頭を下げられる。「ハイッ、伺わせていただきます」と、これまた丁重なご返事をいただいてしまっている。これが先代（のち開基）と黒田雲水の歴史的出逢いであり、初めての〈ことば〉の交流であったと思う。

この時点で、私は自分が何を言うているのか、どれ程、大変なことを約束してしまっているのか、わかったようでまだよくわかっておりません。あまりの激変に、心の整理もつ

かず、ほんとうに困りました。勿論周囲はもっと困っていたに違いない。稍あって、今度は先生から、「二、三御尋ねしたいことがあります。明日から、会社で坐禅するとなれば、或る程度、坐禅のできる環境が必要です。タタミですか――、じゅうたんですか――。また坐禅するための道具が最低限必要です。」それもそうだと思った。続けて、「坐布団（坐蒲）はありますか。鐘は、木魚は、線香台は……！」何もかもあるはずがないのに、頭の中がボヤーンとしているところに、止めを刺されてしまいました。「警策と経本は、必要なだけ、私の手持ちのものを持参致しましょう」とおっしゃる。さあーァどうする、事態はどんどん進んでいる、困りました。

「先生申し訳ありません。何もかも衝動的で、私共には御尋ねのようなものは、何にもありません。先程の取決め、二、三日先送り、させてくださいませんか。会社に帰って準備整い次第電話させていただきます――」「じゃあ、私が最小限の準備をさせていただきましょう。大阪で準備できるものを除いて、それ以外の道具は、福井の永平寺門前に、日本一の佛具屋さんがあります。丁度私の知り合いですからそこにお願いして、直接送っていただきましょう。出来るだけ勉強していただきましょう。」なかなかこの先生、経済的なことをおっしゃる。今度は逆に押しまくられているような感じもする。しかし、これは私の気のせいかもしれぬ。何はともあれヨカッタ。ホッとしたところに今度は「何名分ぐ

らい用意致しましょうか？」「えーッ」みんな顔を見合わせてしまいました。

「キミたち、中途半端はダメだョ。やるんなら徹底して、やんなさい」と、先代からハッパが飛んでくる。「では、取り敢えず、五〇名分、いや一〇〇名、あゝ一五〇名分、お願いします」と言うてしまった。ことごとく売上でも読むような具合である。会社の企画担当不在のときでありますから、まことに行きあたりばったり、私共のいい加減さは、どうにもなりません。「ああそうですか。一五〇名分用意するのですネ。参禅者七名分ではないのですネ」と、驚いた様子で、確認のため御尋ねになる。

当然なことです。目先の数字が、あまりに目まぐるしく変化してしまうものだから、一体、どこの、誰を、どこに坐わらすのか、見当もつかない時分です。まだ出逢いから、五分か一〇分ぐらいのことであります。私も、具体的にどうするかという考えなしに走ってしまった結果でありますから、スキ間だらけ。その間、環境の影響や圧力もあって、どんどん変化してしまっていることはどうしようもない現実でした。

今度は、また先代が私共に向って、「キミたち、やるんなら徹底してやんなさい。自己流はいかん。何なら三日位会社を休んでもよいから、必要なものは、全部準備しなさい」と来てしまった。さらに先生に向って、「うちの社員がこんなに、自分から、やりたい、というのを見たのは、先生初めてです。先生の、

おっしゃる通り何でも、全て協力致しますから、ヨロシク、お願いします。」
嬉しいじゃありませんか、先代社長に、こんなに喜んでもらい、協力まで、約束してくださるなんて、思ってもみない成果でした。ですから、即、昇給、ボーナスアップは、間違いなく保証されたも同然でした。
先代は続けざま、「サアー、君の希望通り、先生のご協力が得られそうだ。この期間中、君達がこんなに、坐禅のよさを感じていてくれたとは思ってもみなかった。やっぱり連れてきてヨカッタ。こうして素晴しい先生との出逢いもあったし、僕もほんとうに運がいい。先生どうぞ、うちの社員のこの一生懸命にご協力くださいませ」と深々に、これまた、合掌低頭されるではありませんか。先生も、また、坐り直して合掌低頭、私共もあわてて合掌低頭。私は、この光景を眼の当りにして、これはエライことになってしもうた。私が今どんな立場に立たされ、何をお頼みしたのか、痛い程、わかりかけてきておりました。あんなに否だった坐禅ではなかったのか。雲水が飛び込んで来てしまったために運命が変ってしまった。先代の見抜く力、説得力で、三六〇度ひっくり返ってしまったのだ。それだけではない。弾みが弾んで会社の中まで、坐禅を続けようというのである。それも、本気で御願いしようとしている。
ただ、一時的行事でするような話ではない。本山と同じ様に、毎朝するということまで話は、完璧に進んでしまった。嗚呼！　どうしよう。これはもう悪

（君子は）本を務む（学而第一―2）　徳ある君子というものは、物事の根本に力を尽す。根本さえ確立すれば、自然に道は生ず。（孔子の教えの基礎を成すもの＝務本の学）

夢です。調子がいいと言えばそれまでですが、その為に、これまでどれ程、得をしたか、損をしたか、計り知れません。

私は先代の性格や考え方をだれよりも、よく承知しておりました。中途半端は断じて許さない方でありますから、先のことがどういうことなのか、この話に対する、先代の、這入り方と、口添え表現の在り方は、脇役を装いながら、スッカリ主役になってしまっている。実に巧妙な這入り方である。この事は、全て私自身の意思によって進めたものであり、決して他の意思や、強制が働いたものでないことをしっかりと確認されてしまっている。

〈自主性を尊ぶ〉先代の網に掛かってしまった。先代は常に『本（もと）を務む』（註）ということが根底にあり、いかなることも基本に忠実ということが絶対条件となっている。何度も「自己流はいかんヨ」というのはそのことである。

状況は、やんわりとけしかけられ、微妙に威されたりしているではありませんか。これは、先代の御人柄が充分発揮されたところだと思いました。ここで少し、先代の〈人なり〉に触れて参ります。

先代の人となり

〈教える　育てる〉ということについては、単に一事業家としてではなく、その域を超えて、徹底された御方であります。この思想は多分に、論語の影響を、強く受けられ、自ら〈学ぶ　習う〉ということには、尋常でないものがありました。誰に対しましても『性相近く、習相遠し』(註)、『教へありて、類なし』(註)を旨として、チャンスがあれば、たとえ道端の人であろうとも、誰にでも、公平に、自分の限りを尽して、直言され、教えてあげ、直してあげ、正してあげる。また社員であれば、言うて聞かぬ者には、泣きながら叩いて気付かせてあげる在り方、並の者ではありませんでした。私もすでに父を亡くしてしまっていつだったか、「君の父さんに替わって」と、随分叩かれたことを思い出します。人はいつでも、「素直さを求め、また、親を大事にすること、大事に思うこと」が条件として求められました。この思想に適う人は、会社でも、どんどん上げ用い、その心と実行が乏しければ、その人の可能性を信じ、出来るまで待ち、なかなか、用いようとはされませんでした。

性相近く、習相遠し(陽貨第十七―2)　人間の天性(気質を含めて)は大差ない、似たり寄ったり。ただその後の習慣によって、大きな距離ができてしまう。習慣は第二の天性。人の性行を左右するものである。

教へ有りて類なし(衛霊公第十五―38)　人は教育の善悪によって支配される。貴・賤・老・少・気質・習俗は関係ない。

（今、我等）宿善の助くるに依りて、…（修證義第一章）　前世の善い行いの助けを得て…。宿善＝前世、過去につくった善根功徳。善根が花を開くこと（宿善開発）。

啐啄の妙　雛がかえろうとするとき、雛が内から殻をつつくのを啐、母鳥が外からつつくのを啄という。すなわち、機をみて両者相応ずること。逃がしたら、またと得られない時機。

一樹の陰、一河の流れも、多生の縁　深い佛教的縁観。袖振り（すり）合うも多生（他生は誤り）の縁＝偶然の出会いも前世からと思う宿縁、仏教的深い哲学。

従って、自らには、とても厳しく〈下学して上達〉の精神を貫き、信賞必罰が、見事に出来た方でした。〈人が育つ、人が救われる〉ということであれば、わがことのように思い、相当な、自己犠牲をどんな形でも思いきって払われる方でしたから、そのための、そなえが、いつでもあり、〈教え導く〉ための網が、そこら中に張り巡らされておった様に思います。常に、それをすべきだとは言わず、また思わせず、それをしない訳にはゆかぬ積極的な心づくり、を教えてくれました。運命の糸で、編みあげられたこの網に『宿善の助くるに依りて』（註）、先生も、また、かかってしまわれたのかもしれない。〈世のため、人のために尽くす〉という同じ命運のもとに方向、価値観を共有された、先生と先代。共に投げ合う網に、『啐啄（そつたく）の妙』（註）とでも申しますか、こうして、掛りあう知遇はまことに深い因縁であり〈宿縁〉としか言いようがございません。かつて『一樹の陰、一河の流れも、多生の縁』（註）とあらわされた諺も、こんなことを示唆し教えているのかもしれない。

流れに身を任せ……

偶然ではなかった、この出会いも目に見えぬ、大きな力で、ぐんぐん手繰り寄せられ、思いとは裏腹に事態は進展するばかり。既にこの時点で、私が気付くには、あまりにも遅すぎてしまいました。ここまで来てしまえば、この流れ

に身を任せるより仕方がない、もう行くところまで行くしかありません。しかしです。みんなの顔を見ますと、会社に帰ってからの状況が、私より早くから承知していたようで、二度と味わいたくない、持ち込んでほしくない、切なる願いと、五日間の厳しさが、ダブッているのか顔色が失せ、心なしか、血の気が引いているではありませんか。此奴、もういい加減、引いたらよかろうにとの暗黙のサインが発せられていることに、気付かない私ではありませんでした。

ここまできた、経緯からして、方向を変えることも、逃げるスキも、期待も持てない状況に、少しでも私がたじろぐところがあれば、私を凝視している、先生の目、先代の目が許さない。もうやるしかない。私は腹をくくりました。

「ならば、先生、徹底して取り組みますので、食事の応量器も、作務着も、板から鐘や太鼓までも、大小とりまぜてお願い致します。それから、警策は、三〇本お願いします。私共は、会社の中に寺でも、ぶっ建てるつもりで参りますから――」とここまで来た時、先生も、ことのあまりの急展開と成り行きに、いささか案じられたのか、「まあ最小限、私におまかせくださいませ。本山とも、よく相談した上で、出来る協力をさせていただきましょう。」ということで何とか一件落着。何だかようやく終ったようでございます。

予期せぬ大きな商談が成立したかのように思いますが、一向に喜びが沸いてこない。何の利益にもつながらない、損の道。しかも、何処まで続くかわから

ない、厳しい道。それを、進んで選んでしまったこの現実。僅か、二〜三〇分のことではありましたが、五日間に優るとも劣らず、へとへとに疲れきってしまいました。

お坊さんになる訳でもないのに、事の弾みというものは、恐ろしいものです。でもまあ、よかったことにしよう。ここまで話し込んできたのに、どうしたことか、未だ名も告げず、名も呼び合わず、よくもここまできたもんだ。お互いの、心と心の葛藤が、見えない糸で、しっかり結ばれて、強い絆となっている。特に意識している訳でもないのに、妙に胸が高鳴り、何か気になりかけておりました。そんなころ先代は、笑み満面で、「私が、社長のムラオカミツヨシです。これは息子（現社長）で、常務をしておりますアリナオです。」夫々の自己紹介もおわり、やがて総持寺をあとにした時は、もうあたりは、すっかり人影もなくもとの静寂に包まれておりました。

再び戻るまじき、総持寺であったはずなのに、四季も折々、それから、それへと手を伸ばし、足を伸ばして各本山でとり行われる摂心会に、続けざま参禅するなど、思いもよらず、また、四トン積みトラック一杯の道具が、会社にドーンと送り込まれることなど、さらに、さらに想像だにせず、兎にも角にも下山と相成った次第でございます。

いずれにしろ、黒田先生と会えたことは大きな収穫には、違いなかった。人

ナリス化粧品の成寿殿での講演風景

の出逢いとは、こんなものか、〈葛藤と闘い〉の初体験ではあったが、過ぎてみれば、痛みも、辛さも、遠い過去に、飛んでしまった。何か大きな、山でも越えたような、言い知れぬ安堵感を思う。また一方、思いのほか、意志の弱い、忍ぶ心の乏しい、自分をイヤという程知ることができた。大概のことは我慢できると思っていたのにアテにならないこともわかった。自分以外の人は、驚く程、忍耐強いことも、内心恐れをなした。また、あんな、環境を求めて修行している、変り者がいることもわかった。先生もその中の一人だ。それが偉い人、立派な人だとは、その時、私にはなかなか思うことができなかった。なにもここまでしなくても、人間になる方法は、いくらでもあると、自分に言い聞かせ、一生懸命そう思おうとしていたことも、今は懐しい。坐禅以外なら、これから、何があろうと起こ

ろうと、越えられそうだという、自信と期待と気持ちが持てたことは、何よりも、よかったと思いたい。以来、随分色々なことが期待通りあったが、私は都度、今をその時に引き戻し、辛さを天秤にかけてみる。いつでもやっぱり坐禅の辛さが勝利する。人間、死んだがマシだと思うことは、そう何度もある訳ではないのだが、この習慣のお陰で、自分が救われたと実感した事がいくどかあった。よい尺度を手に出来たもんだ。その上にこの上なき、先生を〈知る〉ことにもなった。これは何とも、ありがたいことだ。さて走りすぎました。話を汽車の中に戻します。

まあ、色々なことを思いながら、車窓に目をくれていますと、いつの間にか窓ガラスにもう一人の自分を見てしまった。その男は、また、頭の中が、突然パニックに陥っておりました。どう考えても、二つの大きな問題と心配事を抱え込んでしまっている。一つは、いよいよ会社にまで、坐禅を持ち込んで、毎朝となれば、ただごとではない。今一つは、一体費用が、どれ位かかるのか親方日の丸になってしまい、安心して確認もできていない。全く見当もつかない。予算と実績を、毎日やかましくしている経理責任者の顔が、引きつって見える。

どうしよう。電車の中では、みんなが、大丈夫かなあ、ほんとうに明日からまた坐るのか、まだ坐るのかと、これまた、徒事ではない。考えてみれば、無理もない話だと思う、まっただ。

先代と常務は、先程から、もうホロ酔い気分である。小田原駅で買い込んだちくわをポンポンと投げてくださる。ルンルンと、いい気なもんだ。今まで見たこともないエビス顔なのだから、たまらない気持であった。安堵と不安の中で、引くに引けず、帰るに帰れず、あの時の心境今でも忘れることができません。〈ウソから出たマコト〉とは、こんなことか。

先生は昭和三十七年から三十八年にかけて、全国托鉢行脚して、修行から修行、荒行の真直中に私共は、タイミングがよくも悪くも、出くわしてしまったらしいことがあとでわかった。食うや食わず、極限からの生還を遂げたばかりの野人、黒田雲水なのである。さらに承りますれば、再々重々にも、弟を思う美しいばかりの兄弟愛。将来の大を願って、アメリカ修行への道を、ことごとく砕いてくださったらしい、アメリカ禅センターの兄・博雄師。ために念願の渡米一向に実現せず、断られてばかりの御気持、決して穏やかでなかったこと伺えます。いささかその腹いせを、素人の私共に、ぶっつけておいでだったのかもしれない。まあ、いずれにしても、はげしい出逢いであったことは確かだ。

人生は、まことめぐり逢い、出逢いであると言う。いつ何処で、どんな人と

めぐり逢うかによって、人生は決まってしまう。先代社長しかり、今またこの御方に『遇い難くして　いま遇うことを得たり』わが師、わが友、黒田武志雲水である。

道元禅師の『まこと人と逢ふなり』（註）とは、こんなことを謂うたのかもしれない。これが私共と、成寿山善光寺・黒田大圓和尚との、熱く、燃えた、第一日目であり、今日の第一歩となったのでございます。

（第一部　完）

人と逢うなり　中国でご修行中、最高の名僧・如浄禅師に逢ったことが運命を変えた。その衝撃を「人と逢うなり」と述懐された。